

半導体漫遊記

190

湯之上隆

筆者は、サッカー名

門校の静岡県立清水東高校出身であることから、サッカー観戦が大好きだ。特に、国の威信をかけて、真剣に相手を削りに行く本気モードのワールドカップは、見応えがあり、ハラハラドキドキの連続であるため、日本戦以外も極力生放送で見ようとしている。

疑われるケース」が全48試合で335件あり、その内17件について主審がVARのアドバイスに従って画像を確認した結果、14件の判定が覆り、3件は審判の判断が維持されたことを報告した。この14件の判定の変更は、試合の行方に甚大な影響を及ぼした。

次に、RTDについて説明する。今回FIFAは、各国にタブレット端末を2台提供し、1台はスタンドから試合を観察するアナリスト向けで、もう1台はベンチにいるコーチングスタッフ向けである。

だが残念なことに、筆者は可能な限りの試合を見たが、RTDを有効活用できていた国は無いように感じた。しかし、今後はRTDを有効活用した国が勝者になると思う。その根拠は、次の通り。

「1-2-7」とか「8-1-1」など、非常に布陣をAIは得出すかもしれない。そして、RTDをAIも押し寄せてきた。も

が、ワールドカップにIoT、ビッグデータ、AI等のIT技術(微細加工研究所・所)が解析して、ゲームプランを180度転換するような指示を送るかもしれない。ならば、これらIT技術をいかにうまく活用するかを考えるべきである。

次はAI活用か?

ITを本格導入したサッカーW杯

今回のロシア大会

は、下馬評の低かった日本代表が1次リーグを突破して決勝トーナメントに進み、後半ロスタイムで逆転されてしまったが、優勝候補の一角であるベルギーをあと一步のところまで追いつめた。この戦いに筆者も驚いているが、世界中から驚きと称賛の声が上がっている

めて導入された二つのITシステム「ビデオアシスタント・レフェリー(VAR)」と、「リアル・タイムデータ(RTD)」を取り上げたい。

それは数字に明確に表れている。2014年ブラジル大会と18ロシア大会のゴール数を比較してみると、ペナルティキック(PK)の数が、9ゴールから18ゴールに倍増している。これは今まで見過ごされていたペナルティエリア内での反則行為が、VARによって

FIFAは、サッカーは、もはや人間のプロ棋士はAIに勝てなくなった。それどころかAIは、人間の常識からは「あり得ない」とする手を平気で打つ。その結果、「AI流」と呼ばれる布石がプロ棋士の間では流行している。

これは同じことが、サッカーでも起きるの

表1 2014年と2018年の1次リーグの得点内訳の比較

		2018年	2014年	
試合数		48	48	
総ゴール数		122	136	
流れの中でのゴール	合計	73	91	
	ボールゲインからの合計	43	69	
	ゲインの位置	アタッキングサード	10	8
		ミドルサード	17	26
		ディフェンシブサード	16	35
	それ以外	30	22	
特点数に占める割合	59.8%	66.9%		
セットプレーからのゴール	合計	49	45	
	直接	ペナルティキック	18	9
		フリーキック	5	2
	コーナーキック	15	19	
	間接フリーキック	11	9	
	スローイン	0	6	
	特点数に占める割合	40.2%	33.1%	
総シュート数	1168	1292		